

【一発ネタ】 ナザリツ  
ク地下大墳墓のリベリ  
オン

星の海

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オーバーロード最大の萌えキャラにして苦勞人系主人公モモンガ様にさらなる苦難を背負わせる話。(続きません)

# 目次

【一発ネタ】ナザリツク地下大墳墓のり

ベリオン

---

1



# 【一発ネタ】 ナザリツク地下大墳墓のリベリオン

「悪の組織っていうものには裏切り者が必須なんですよ」

ギルドメンバーの中で誰よりも『悪』に対して拘っている男、ウルベルトはかつてそう語った。

「……いや、すみませんウルベルトさん。何言ってるかよく解らないんですけど……」

VRMMO『ユグドラシル』におけるトップギルドの一つ、『アインズ・ウール・ゴウン』のギルド長、モモンガは困惑気味にそう返した。

「ええ？ 解らないですかほら、百年位前にシリーズ化されて人気だった、バツタの怪人が主役の特撮アニメとか知りませんか？ 邪悪な企みを持つ集団の中には、それに相反する正しき心（笑）とやらを持つ存在が居てこそより悪の魅力が際立つんですよ」

「……あの特撮はそんな悪役鼻負な考えから作られたものではないと思いますが……」

熱心に言葉を紡ぐウルベルトに苦言を入れた形になるのは純白の聖騎士が如き出立ちのメンバー、たっち・みーだ。

「……はあ、相変わらず解つてませんねえ。たつちさんは……」

「製作者の意図を歪める形で自分本位な語りをするのは如何なものか、と言っているだけですよウルベルトさん」

「はいはい、そこまでにしましよ二人共。……つていうかナザリック防衛目的の為にNPC作成会議で態々そんな語りを入れたウルベルトさんの意図を私は聞きたいんですけど?」

互いに険悪な様子で言葉を投げ合うウルベルトとたつち・みーの間に割り込み話を進めるのは、粘液質な不定形生命体の形を持った数少ない女性メンバー、ぶくぶく茶釜である。

「いや、ですから遊び心ですよ、言うなれば。組織運営なんて余りに磐石過ぎてもつまらないじゃないですか。1人位は主人や組織に二心抱いている、みたいな存在が居ても面白いと思いませんか?」

ウルベルトの熱弁に、メンバーの大半は渋い反応を示していたが、一部のメンバー達はその語りに対して熱烈な反応を見せた。

「確かに、余り忠誠心の高い奴ばかり居るのもリアリティーが無いですよ。いいんじゃないですか良いギャップですよ。例えばギルドが滅ぼした一族の生き残りを捕虜として連れて来たのが頭角を現して……とかですかね?」

「いやアレだ、どうせなら元ネタに最大限あやかっただけで憎つくき人間種共を攫って来てヤツバイ人体実験の末に大半が死んじまったけど唯一完成した強化人間とかいいんじゃない？実験の主導者はギルマスって事でもちモモンガだな」

「ちよつ!?巻き込まないで下さいよ私を!!?」

己の琴線に掠めるものがあつたのか早速一案を出してみせるタブラに続いてアインズ・ウール・ゴウンのトリックスター、るし★ふぁー迄もが乗りに乗った様子で賛同する。モモンガは必死に抗議するが、具体的な発案に触発されてか徐々に比較的良識のあるメンバー迄がガヤガヤと会話に参加して来た。

「んー、でも実際 アインズ・ウール・ゴウン ウーチは悪役ロープレだし、いいんじゃない元々は敵だった系のが一体位居ても?」

「丁度100Lvで機工系居なかつたし強化人間設定いいな。ギルド内のメンテ枠も兼ねて……」

「あー外様だから地位は高くても雑用枠的な?」

「だったら女の子にしようぜ女の子!!?改造過程でのくつ殺要素とツナギタンクトップガテン系女子的な要素入るから新しい萌えが広がって……!」

「弟、黙れ」

「えーそこはガツシリした軍人系でしょ生き残り設定つけるなら!こう元は愛想良さそ

うだったり真面目そうな顔付きしてたのが長年の実験生活によって荒んだ藪睨みの凶悪面になったって過程が楽しい感じで……」

「所詮設定だからギルド防衛的には問題無いけど、実際はそんなヘイトMAXな奴守護者には置かないでしょ。プレイア<sup>戦</sup>メ<sup>闘</sup>イド<sup>ド</sup>の強さでいいんじゃない？」

「だからそれはほら、あれですよ。半ばへし折れた負け犬として無気力な忠誠を誓っているけど、最後に残った人としてのプライドとかつての仲間達への愛情がその身を支えている、みたいな……一見リアリストな皮肉屋だけど中身は存外熱いものを持って……」

「ふむ、俺も好きだぞそういうキャラ……」

「……だから」

「…………あゝ…………」

「……うわぁ…………」

元々凝り性な人間が多い故か、完全に火が付いてしまったらしい『裏切り者系キャラ』製作に向けて熱弁をそこかしこで交わすギルドメンバー一同に、置いていかれた感の凄まじいモモンガは思わず乾いた呻きを洩らす。

「と、いう訳でモモンガさんヘイト矛先の筆頭ね」

「まあギルマスだから当然だわな」

「いやだから何で………いや、まあいいですよじゃあ私が主導したって設定で。どうせゲーム上で何かペナルティ付く訳でもありませんから………」

ゲーム内に表情をリンクさせる設定があれば確実にニヤニヤとした愉し気な笑みを浮かべているであろうウルベルトとるし★ふあーの鬼振りに再び抗議し掛けて、モモンガは色々面倒な気分になり半ば投げやりに同意した。

基本的に悪ノリしたら手のつけられないメンバー筆頭が二人である。どう反対した所で却って面白がりゴリ押しを始めるのは目に見えているのだ。ならば抗議するだけ労力の無駄だろうと、モモンガは諦めの境地に達したのである。

「流石ですモモンガさん、その漢気。ギルマスの鑑ですね」

「かっくいくー皮剥けやがって惚れちやいそうだぜモモセラレーターー!」

「元ネタ解らないから振らないで下さいよ……」

画して一部の悪ノリによってアインズ・ウール・ゴウンの言わば獅子身中の虫、第4階層『地底湖』の階層守護者にしてガルガンチュアの管理責任者は誕生した。

「……じゃあ設定はこんな感じで。じゃあモモンガさん、折角ヘイト筆頭になって貰いましたから名付け親の権利は譲りますよ。お好きにどうぞ」

「それ好意じゃ無くて半ば嫌がらせでしょ私にネーミングセンスあんまり無いのを知っ

てて!!?………じゃあ、アレですよ。名は体を現すつて事で……リベリオン、なんて……」  
「お、モモンガにしてはいい感じ?」

「いいですね!じゃあそれで」

その名は、<sup>反</sup>リベリオン<sup>者</sup>。

後に、モモンガは心の底からこの時安易に同意した事を後悔する。

皆で作ったキャラなのだから愛着はある、消えて欲しい訳では無い。しかし何故自分を憎悪<sup>ヘイト</sup>の矛先にしてしまったのか、と……

(……そうだよ、何で忘れていた!?居るじゃないか、裏切り云々で考えたなら例え設定そのままだったとしてもぶつちぎりでヤバいキャラが………!!?!!?)

「いやはやどくも、遅れて申し訳ありません皆様。私の様な末席の味噌つ滓が遅参など、モモンガ様に変なご無礼をば。ええ決してメンテ中に急に呼んでんじゃねえよ出汁ガラ野郎なんぞとは欠片も思つてはおりません、ハイ!」

「第4階層守護者、リベリオン。…ブフツ！…：御身の前に」

「……正直今直ぐに貴方を縊り殺してやりたくて堪らないわこのクソ人間……!!？」

「元人間だよ守護者統括サマ。骨格から内蔵から総入れ替えされて脳味噌まで弄られた奴はもう人間なんて粹で呼称よばれちゃあいけねえ。……さて置きやれるモンならやつてみたら如何あ？我等が至高の存在にして頂点たるモ・モ・ン・ガ・様が俺の不遜を見逃す以上、俺はこの振る舞いを認められているつて事だぜ？……そういきり立ちなさんなや恋する乙女様。あの御方は愉しんでいらつしやるのよ、怨み骨髓にも関わらず精々が憎まれ口を叩くのが関の山の、この俺の道化ピエロ振りを、な。……誰よりも組織を快く思わない俺だからこそ誰よりも理解している。俺一人がどう足掻いても、天地がひっくり返ろうが反逆なんて成功しやしないってなあ。…お前も笑つてりやあいいのさ。内心震えながら必死に吠える、無様で惨めな負け犬を、よ」

「シーズちゃんちゃんと自己メンテやつてる？ンな渋い空気撒き散らすなら自分でやりやいいつしよ俺に任せずに」

「……………貴方の事は嫌いですけど、腕前は認めている。それだけです」

「……何故、貴様がそこまでやろうとする……………」

「ん？ああ嫌がらせですよ。ほらムオムオングア様の想定が甘かったからこんな事態になつているのに立場上自らシャルティアちゃんを止めに行くことも出来ないく的な苦悩を背負つて頂きたいんですよねえ」

「……変わらんな、貴様は」

「そりやそうでしょう。私はブレませんよ、忘れてたまるかあの屈辱を、理不尽を。それでも貴方様は無視出来なあい。貴方様が斃れられたら全てが終わりだから。デミちゃんを抱き込んでますんで強行突破も不可能でございまあす……………俺が行くなら文句は出ませんぜ、何しろナザリック一の嫌われ者ですもので……………まあ付け加えるなら

……………まあ付け加えるなら嫌いじゃ無いんですよ、

アインス・ウール・ゴウン

此 処 は 兎 も 角 此 処 の 連 中 は。

私からすれば腐れた最悪の存在に対して、健気に尻尾振つて忠誠誓う馬鹿ばかり。子は親を選べない、所か親を最悪の真逆、至高の存在と仰ぐ突き抜けた馬鹿っぷりが、私は存外好ましく思つてるんです……………貴方がもし助けたとして、死にたくなる程の自己嫌悪を未来永劫続けますよシャルティアは。忠犬が死ぬより辛いのは、飼い主の手を咬んでしまう事でございませす……………だからアンタは、黙つて見てろ」



性別 男

種族 人間（強化人間）

所属 ナザリック地下大墳墓

役職 第4階層守護者

ナザリック内機工最高責任者

年齢 人間時享年27（以後数十年）

住居 第4階層『地底湖』の工房&amp;研究所

クラス チューンド

マシンマスター

ファイター

コマンダー

誕生日 中風月14日（人間時）

趣味 機械弄り、シズ弄り、モモンガへの嫌味を考える事、反逆計画の考案

概要 ナザリック地下大墳墓唯一の人間種。とはいえその身体は殆どが骨格や筋

肉を合金製、人造強化筋肉への置換が行われ、更には脳内にまで神経伝達経路や脳内物

質への薬物投与により手が加えられている為身体能力的なスペックでは亜人、獣人種を

も凌ぐ殆ど別の生き物と化している。

e t c ……

人間時代はとある国の軍団にて若くして一個中隊を率いる程のエリート士官だった(クラスのコマンドー等はその頃の名残)がアインズ・ウール・ゴウンと戦争になった際にその圧倒的な戦力差から部隊を潰滅させられ、他数名の部下と共に捕虜となる。忠誠心溢れる軍人であった彼は祖国に対する交渉材料として扱われる事を断固拒否、軍人としての死を望んだが、アインズ・ウール・ゴウンに逆らった愚か者達に対する見せしめとして悪辣な人体実験の材料とされる。

実験内容は脆弱な人間種のスペックを何処まで上昇出来るかという、メンバーの全てが異業種で構成、率いる部下にも人間種が存在し得ない彼らからしてみれば遊びの様なものであり、被験者の命の安全を一切考慮しない苛烈な実験によって彼と部下数名の心身はズタズタにされた。

数年にも及ぶ拷問の様な実験の結果、部下達は全員苦痛の果てに死に絶えたが、幸か不幸か人間種としては最高峰に近いスペックを持っていた彼だけは生き延びた。やがて考え付く限りの全ての実験を終えたアインズ・ウール・ゴウンの面々は、数々の実験を経て尚生き延びた彼に興味を示し、彼を自分達の配下として迎え入れ、彼に生き延びる道を示唆した。度重なる苦痛に精神が半ば壊れ掛かっていた彼は、それでも己が身体を弄んだ、愛する部下を玩具の様に弄り回した挙句ゴミの様に廃棄したアインズ・ウール・ゴウンへの憎悪を手放さず、その申し出を拒否した。

『貴様等外道の狗になど俺は成り下がらん。殺すのならば殺せ、このまま俺を生かしておけば必ずいつか力を蓄え、貴様等を滅するべく牙を剥く。』

そう言い放った彼に対してアインズ・ウール・ゴウンの長、モモンガは邪悪な笑みと共に言い放った。

『いいだろう、我等に対する貴様のその憎悪を、憤怒を、嗔恚の心全てを許そう。貴様には機会をやる。我等に刃向かうその機会をな。故に貴様はその憎しみを抱いたままに、我等の飼う狗となるがいい。貴様がここで死ぬれば貴様と貴様の部下のこの数年は全てが無駄だ。つまり貴様等の存在そのものは初めから無意味だったということだ。そのまま何も成さない文字通りの犬死を果たしたいのなら好きにするが良い。我等は退屈を何よりも厭う、貴様の様な危険な狗を飼うのもまた一興だ。身体を休め、牙を砥ぎ、我が首元を喰い千切らんと足掻いて見せよ』

『我がアインズ・ウール・ゴウン唯一の異物にして獅子身中の蟲よ、今日より貴様の名はリーリベリオンだ』

彼リーリベリオンは屈辱に身を震わせ、涙を溢しながらもその申し出を受け入れた。自分と今は亡き部下達の怨みをいつか晴らす為に、彼は自らの心を手折った。以来彼はその強化された力を憎きアインズ・ウール・ゴウンの為に振るい山と功績を築き上げ、遂には守護者の一角として君臨するに至った。

全てはアインズ・ウール・ゴウンへの復讐を果たす為に。

人物　かつては規律に厳格ながらも下の者達への気遣いを忘れない、誠実さと愛国心に満ち溢れた軍人の鑑のような性格であったが、長きに渡る実験生活と部下を救えなかつた絶望から精神を半ば病み、捻じ曲がつた性根を持つに至つた。現在は皮肉屋にして毒舌家、常に他人を小馬鹿にする様な薄ら笑いを浮かべて他人の精神を逆撫でする様な言動を好む。特に至高の存在、特に実験の主導者であるモモンガに対しては慇懃無礼を絵に描いた様な態度を貫き、忠誠心に満ちたナザリックの面々を怒らせている。

復讐心は常に心の中で燻つてはいるものの、アインズ・ウール・ゴウンの余りの強大さに、自らがこのまま幾ら力を蓄えた所で未来永劫及ばないであろう事を半ば悟つている為、心が半ばへし折れている。周囲のヘイトを稼ぐ事に一切頓着しない言動は半ば死にたい気持ちの表れでもある。復讐と死への渴望の間で揺れ動きながらも諦め切れないリベリオンは、半ば惰性に身を任せながら日々牙を砥ぎ過ごす。

そんなリベリオンだが、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーを怨みながらもその配下である守護者達を始めとした配下達には怨みを向けてはいない。軍人としてのかつての根幹が、命令に従つただけである彼らへ怒りを向けることを良しとしなかつた為である。至高の存在を神と崇め、恐れ多くも親の如く慕う彼らの存在を寧ろリベリオンは好ましく思っている。(当然部下を直接殺した存在や自分を改造した存在等、一部

例外はあるが)

取り分け気に入っているのは身体的に近い構造を持つが故に関わることの多いシズ・デルタ。ナザリックの面々の中では至極真つ当な感性を持ち、何処か小動物を思わせる雰囲気を持つ彼女の事。マスコットの様な感覚で猫可愛がりしている。最も嫌われている(とりべりオンは考えている)事を承知でからかう様な言動をする辺り、異性云々といった感覚からちよつかいを出している訳では無い模様。